慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	岩瀬文庫で教えられたこと(講演録)
Sub Title	Thus spoke Iwase bunko
Author	塩村, 耕(Shiomura, Ko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2011
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.46 (2011.) ,p.5- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫開設五十年記念講演とシンポジウム古典籍の探求 : 書誌学の世界 挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20110000-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

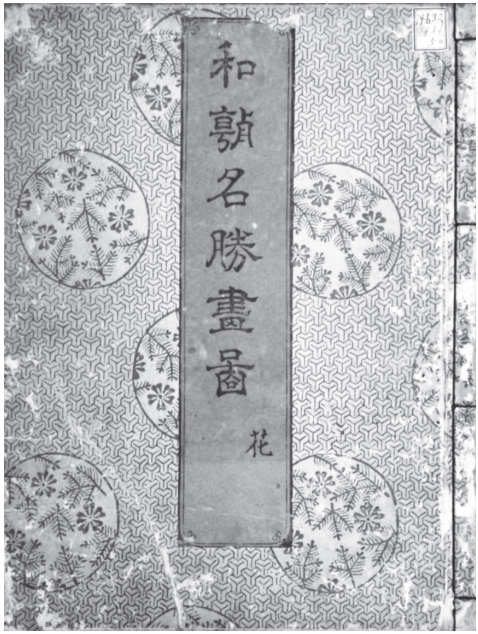
岩瀬文庫で教えられたこと（講演録）

塩村　耕

一、書誌調査という仕事

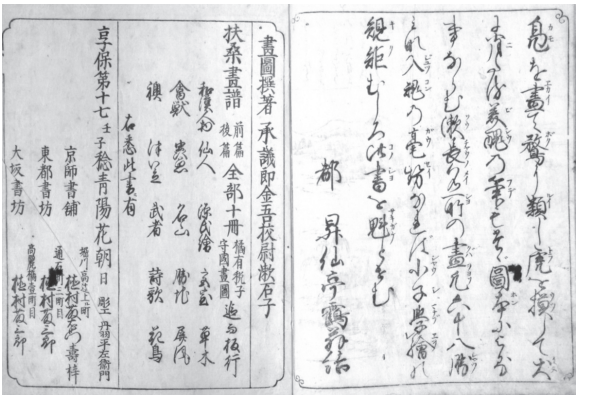
最初に書誌調査というのは、どんな仕事をしているのかということを、具体的な例でお話ししたいと思います。これは享保十七年（一七三二）に刊行された『和朝名勝画図』という、名所の風景を描いた地味な絵本です【図版1～2】。

著者の漱石子は、『国書人名辞典』に「藤井氏、京の人」とあるだけで、伝記は不詳。こういうのは本を扱う上で口惜しいわけです。そこで何か手がかりはないかとさがすと、巻末の部分【図版3】、刊記の前にある奥書にヒントがある。その作者肩書に「承議郎金吾校尉」とあり、これは正六位下・右衛門尉の唐名（中国風の呼称）です。そこで『地下家伝』をひもとき（今はデータベースがあります）、藤井姓の者を捜索すると、いたいた、藤井重好という人。時に正六位下・大舎人大允兼右衛門少尉でぴったり一致する。

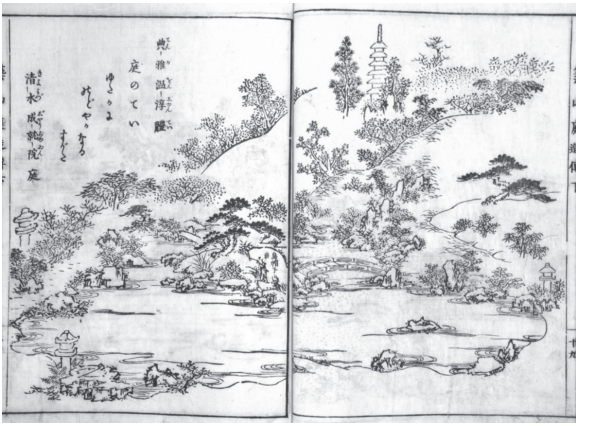


図版 I

図版 I



図版 3



図版 4

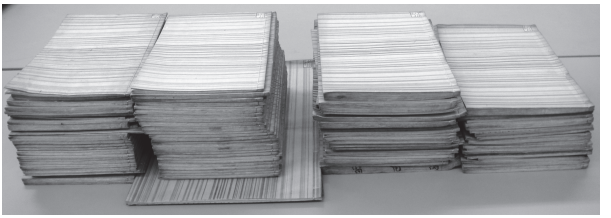
次に「藤井重好」で国文学研究資料館の「古典籍総合目録」データベースを繰ると、享保二十年刊『築山庭造伝』の画工であることがわかります。岩瀬文庫というのは便利な所でして、世にあるたいがいの書物は揃っている。その本もちゃんとある【図版4】。出してもらって見ますと、その見返に同じように「承議郎金吾校尉藤井宿祢重好画図」とあり、画風も一致します。これで、今までばらばらにあった二つの絵本も繋がり、一件落着となります。

こんな風に、ただ単純なマニュアル的な作業だけではなく、それぞれの資料に応じてちょっとだけ好奇心を発揮して、ひと手間、調査の手を入れてやる。そうやって、よりよい書誌データを集積することが大切なんだろうと思います。もっとも、その「ちょっとだけ」というのが肝要で、あんまり専門的に調査をやり過ぎても、一生がいくつあっても足りなくなってしまう（笑）。

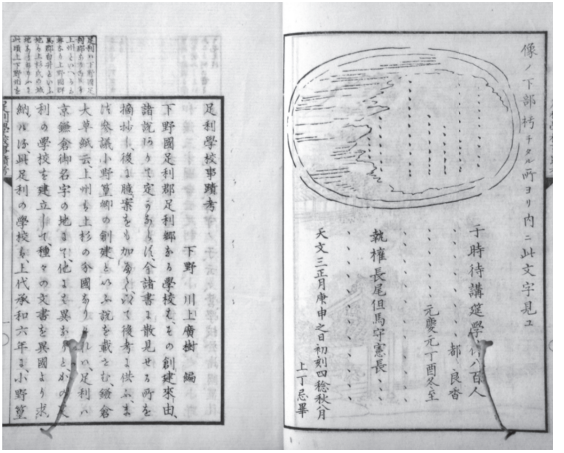
あるいはまた最近の例をお話ししますと、この一山は岩瀬文庫の旧目録では『足利誌資料草稿』として一括される九十九冊の資料群です【図版5】。これらの多くは、明治初年に編纂された足利町及び周辺諸村の地誌の稿本でして、未刊に終わったため貴重な資料だろうと思います。こういう一括資料は、一点一点ほぐしてやって書誌記述を行っています。すると、その中に古典籍のメッカ、足利学校関係の重要資料がありました。

まず、足利学校に関する基本資料といってよい、川上広樹著、明治十三年刊の『足利学校事蹟考』の版本と稿本があった【図版6～7】。比べると微妙な差異があります。また、それに先行する足利学校の研究書でありながら、未刊に終わった、岡田秀行著、岡田祐吉編『足利学校誌』の稿本集も出てきた【図版8～9】。写真の部分は足利学校の教化を受けて地元の人々がいかに善の道に進んだかという、一種の説話集の部分です。『足利学校誌』については、これとツレになる別稿本が足利学校遺蹟図書館後援会より影印刊行されていますが、そちらの方にはこの説話集は含まれていません。これにはさらに別原稿までありまして、図版9の方は江戸の戯作者、四方梅彦に依頼して文章に手を入れてもらった改訂版です。

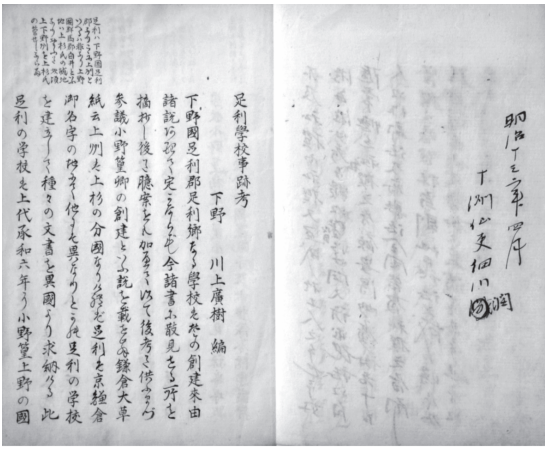
以上のようなことを、書誌データの中にどんどん書き込んで行く。そうすると、データベースから必要な文字情報によって検索をかけることが出来る。その結果、従来型の冊子目録やカードでは決してわかることのない、書物と書



図版 5



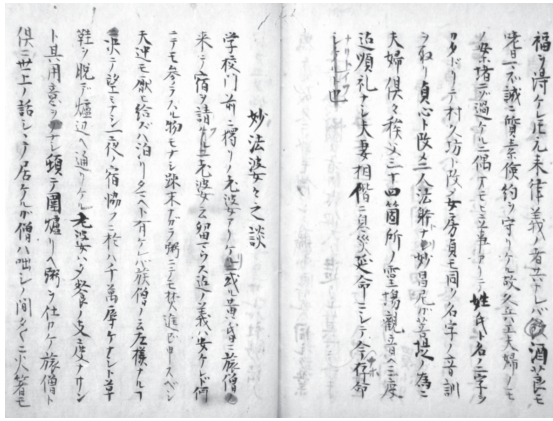
図版 6



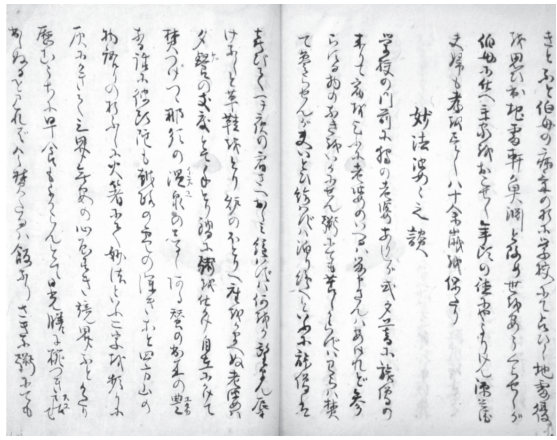
図版 7

物との間にある関連付けが可能となります。書物の研究にとって、この「関連付け」というのが何よりも重要なことなのです。

岩瀬文庫の書誌データベースはつい先月（二〇一〇年十一月）、試験公開を開始しました。まだ完成していませんが、全体の九割近くはカバーしているはずです。ここでは詳しく紹介はいたしません。岩瀬文庫のホームページから入れ



図版 8



図版 9

ますので、お家でぜひご覧になって下さい【図版10〜12】。古いことをお調べになっている方ならば、「おやっ」と思っていただけるような資料にきっと出会えるはずです。

二、岩瀬文庫で教えられた最大の智慧

ところで、先ほどの足利関係の一山の中から、地元の文人で、旧幕時代には尊皇の志士として活躍した、相場古雲による自筆の雑記貼込帖『摘翠帖』も出てきました【図版13】。この人も足利学校の保存に尽力した人物です。その

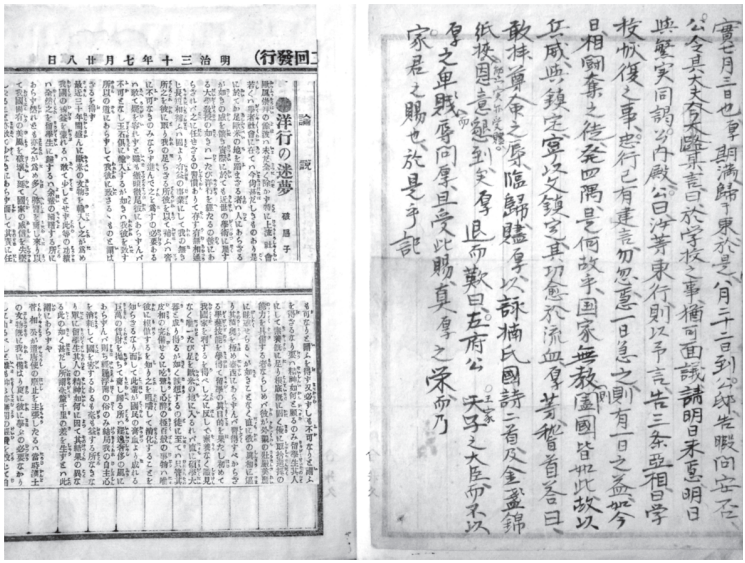
図版 10

項目	内容
函番号	147
番号	86
旧書名	足利誌資料草稿
数量	2
単位	冊
書名	足利学校誌草稿
書名ヨミ	アシカガ゛コウヴッシ゛ウコウ
書名の備考	書名は原表紙中央書外題「足利學校誌草稿（上／編）」「足利学校誌草稿（下／編）」による。上編の書名の「學校」は「学校」の誤か。
版等	写
書型	大
存欠	全2巻
原装・改装	原装
丁数	53

図版 11

寸法	24.8×17.2
編著者	岡田秀行著・岡田祐吉編
編著者ヨミ	オカダ゛ヒデユキ・オカダ゛ユウキチ
成立	序跋等なし。
成立推定	幕末写
紙・書写の様様	編者草稿本。
内容	足利学校の近隣に住む著が、その歴化を欲して著行を為した逸話を集めた書。漢字カナ交ぜ、所収話は、上編「雨師清風話」「強盗清師和兵衛清之事」「李子西女之事」の3話、下編「学校門前与四右衛門之事」「雲老女由緒之事」「地蔵料魚潮事」「学校門前僕夫又兵衛頓狂病事」「砂浜盗々之話」の6話。講談風の語り口で、会話文に語彩が多い。足利学校誌（第6～6）参照の。より早い刊行の草稿本。
旧蔵者/識語	印記「川上文庫」（朱方印、川上広樹）。
備考	旧目録、「足利誌資料草稿」として一括する99冊のうち第67～68冊。共紙表紙本に墨表紙（外題剥毛目）を付す。半丁9行。朱書訂正のある草稿本。下編の書型24.8×17.7、上編：21丁、下編32丁。下編の原装表紙に「九行書附五十三枚／日数五日草稿」とあり。
大分類	1和書
和分類1	11教育

図版 12

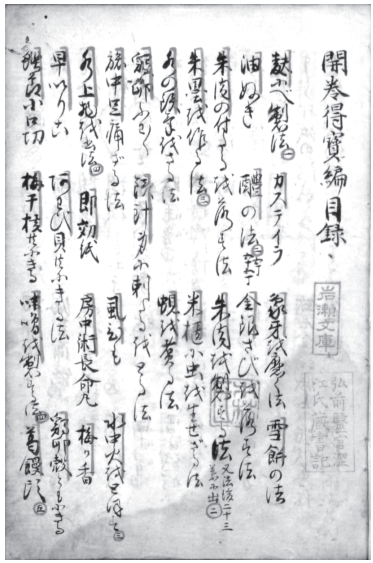


図版 13

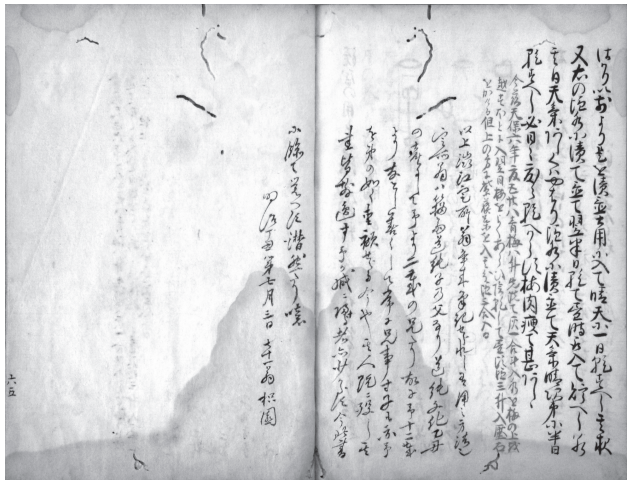
冒頭に、志士として東西に奔走していた慶応四年、友人岡谷繁実（尊皇の志士、歴史家として著名）とともに京都に滞在中、前左大臣近衛忠房より、足利学校の文庫保存について支援を得た件を回想した漢文が貼込まれていました。こういった、文庫や古書に各別熱い思いを抱いた人たちに関する資料が、岩瀬文庫には妙にたくさん所蔵されているような気がします。

これも最近の例です。『開巻得宝編』写本一冊。この書名から、わざわざこの本を出してもらって読もうと思う人は少ないでしょう。内容は、「象牙を磨く法」だの「朱肉の付きたるを落とす法」だの、「鶏卵ふわふわ」や「カステイラ」の調理法だの、生活便利百科みたいなハウツー本です。中には「房中術長命丸」など興味深い記事もある（笑）。まあ、よくあるタイプの本ですが、そこには渋江抽斎と森立之（枳園）の蔵書印が捺してあって、スジの良い伝来とわかる【図版14】。巻末を見ると、明治十年、時に七十一歳の森枳園が記した識語があり、この本は渋江

抽斎の父渋江定所（道陸）による筆録とわかる【図版15】。そして、抽斎との交友が回顧されています。一部を読んでみましょう。



図版 14



図版 15

…道純（抽斎のこと）、文化乙丑（二年）の産にして、予より二歳の兄たり。故に予、十二歳より友とし善くして、常に兄事す。予も亦、予を弟の如く愛顧せらる。今や其人既に歿し、其書皆散逸す。予が蔵に帰する者、亦少からず。今此書に臨て覚へず潸然たり。噫（ああ）

どうですか、良い文章ですねえ。鷗外先生に是非ともお教えしたかった資料です。必ずや『渋江抽斎』の中で、心をこめて紹介されたことでしょう。

書物には悠久の命があるのに対して、それに関与する人間の命ははかない。その間にある悲しさというか、一種の感懐がここには記されています。そして、これを書いた森枳園自身も昔々に亡くなっているわけですから、今これを見る我々は、これに輪を掛けた感懐を更に覚えるわけです。岩瀬文庫では、知らず知らずのうちに、こういう経験を積み重ねることが出来ました。

本日の私のお話の表題ですが、岩瀬文庫で教えられたこと、その最大の智慧は何かというと、「人間は必ず死ぬ」ということです（笑）。「当たり前やないか」と怒らないで下さい。その当たり前のことが、なかなかわかりにくい。少なくとも、以前の私にはちゃんとわかってなかった。

そもそも、人間と動物との違いとは何かというと、最も本質的な点は「死」の概念があるかないかということだろうと思います。人間だけが墓だとか葬送儀礼をもっている。実は書物もその延長線上にあるということに気付くわけです。こういう人間観を表すことばとして「ホモ・メモル・モリ（homo memor mori＝死を知る人）」というのをでっち上げてみました。西洋中世の箴言、メメント・モリをもじってみたわけです。

そして、そこからさらに「ホモ・リブラリウス（homo librarius＝本の人）」ということばを考えてみました。人

は本によって、個体の死を乗り越えて、過去や未来の人とコミュニケーションを交わすすべを覚えた。書物を通して、何らかの形で世代間のコミュニケーションに関与する人、それを人の中の人、最も人間らしい人間として、ホモ・リブラリウスと称したいのです。この新語は方々で触れ回っているので、今日はぜひこのことばを覚えて帰って下さい（笑）。

ただ、単に本が好きだとか、新刊本屋によく行くというだけではホモ・リブラリウスとはいえません。どうしても古本屋に行ってもらわないといけない。会場に神田の一誠堂さんがお見えになるので、べんちゃらを言っているわけではありません（笑）。あるいは文庫や図書館に足を運ぶ必要がある。

書物というのは、あんまりたくさんあるものだから、その有り難みをつい忘れて邪険にしがちなのですが、実は人類史上、最大最高の発明は書物であって、それが文明の発達を決定づけた。書物がなくなったら、どんな恐ろしい社会が出現するか、想像してみて下さい。したがって、書物こそが最も重要な人類の資産なのだということを、今一度確認しておきたいと思います。まさか、この会場に「いいや、そうじゃない」とおっしゃる方はいないでしょうが（笑）。

三　書誌学とは何ぞや

三十代のはじめごろ、亀井孝先生（言語学者、一九九五年没）と古書を通してお付き合いが出来、頻繁に電話のやりとりをさせていただく一時期がありました。亀井先生はたいへんな愛書家でもあり、御自身、スジの良い古書を収集された方です。ある夜のこと、「塩村くん、君は書誌学とはいったい何だと心得るかね」との御下問が、例によって何の前置きもなくありました。恥ずかしながら、当時の私はその質問にしかと答えることが出来なかった。そして、

その悔しさがオリのように心の底に残りました。今だったならば、こんな風に答えるかな、というのが以下のお話です。

まず、書物の研究とは、本質的に比較研究であろうと考えます。なぜならば、文書類と違って、書物は基本的に複製されるものであって、その間にある差異に、書物を解く重要なカギがあるからです。また、類似する書物、関連する書物との比較も、同じように重要だからです。書物は単独のものを扱っていたのでは、なかなかその正体がわからない、そういう性格のものだと強く思います。

いっぽう、書物は数が多く、おまけに移動したがる本性があり、その結果、あちこちに散在するのが常で、そのことが比較研究を物理的に難しくしています。

書誌学とは、比較研究の手がかりとなるよう、書物をいかに記述すべきか、追究する学問ではないでしょうか。したがって、書誌学者の多くの労力は、共有するコードを確立することに費やされるはずです。

ご存じの通り、書誌学は江戸時代以前からあったことばではなく、ずっと後になって、英語のbibliographyを直訳的に翻訳して作られた用語です。が、奇しくも実に適切な名称となっている。つまり、ことばで「記述する」ということが、とても重要なことなのです。これをもし書物学だとか図書学だとかの名称にしてしまうと、かえって学の本質を見失うことになってしまうように思います。

さて、そういった書誌学が発達してゆくためには、いろいろと障害がある。これを古典的名著『書物の敵』に倣って、「書誌学の敵」と呼んでおきましょう。私の考える書誌学の敵とは、まず第一に画像です。つまり写真やコピー、特に電子画像です。

基本的に書誌記述はテキストによるべきものです。画像の普及と低価格化は、比較を精緻にするいっぽうで、過度の依存は「記述すること」と「実地に調査をすること」への軽視につながる危険性がある。殊に記述力を痩せさせることになりはしないかと危惧します。記述への努力を怠ることは、すなわち書誌学の衰退に他ならないのです。

それから、言うまでもなく画像は検索性が悪い。つまり大量の画像の中から、必要な情報を抽出することが出来ません。もちろん画像データベースはたいへん便利なもので、現に岩瀬文庫の調査においても、言い尽くせないほどのお世話になっています。が、その恩恵を承知の上で、敢えて以上の問題点を指摘しておきます。

もう一つの書誌学の敵は「衒学」だと思います。人の知らぬ本を知る「快」は、往々にして人を衒学の「愚」に陥らせるような気がします。本日、何度も申し上げている通り、何せ書物は数があまりにも多い。そのような状況にあって、出来るだけ人々と情報を共有するというのが、そもそもの書誌学の精神だった筈です。衒学というのは、それと逆行する、知を囲い込む発想ですから、厳に、そして意識的に戒めないといけません。「衒学」の反対語が見つかりませんので、例の造語癖を発揮して「衒・無学（anti-pedantry）」というのを拵えてみました（笑）。ニュアンスは伝わりますでしょうか？　これを書誌学者の座右の銘として提案したいと思います。

四　文庫にこめられた先人の志

最後になりましたが、ここで西尾市岩瀬文庫について駆け足で紹介しようと思います。岩瀬文庫は明治四十一年五月、地元の実業家岩瀬弥助が設立しました。その特徴として、以下の諸点が挙げられます。まず、当初より市民に公開された私立図書館でした。しかも、洋装本ではなく和装本（線装本）を主体としました。収書は特定の領域に偏っ

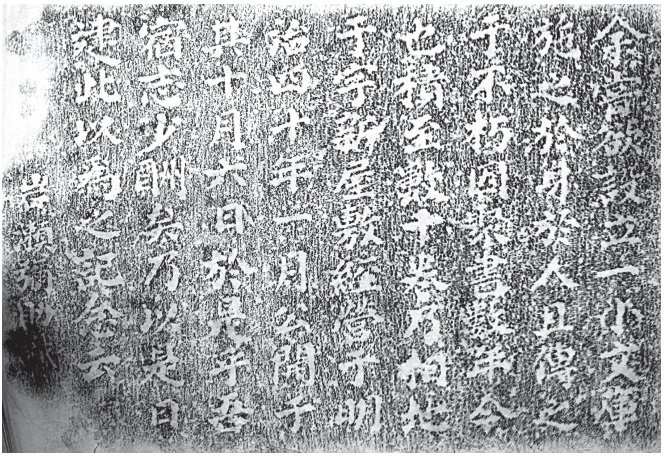
ていません。もっとも、世の中にあまりにも多く残されている医書と仏書は、ある程度避けた形跡があります。本を集めた明治大正という時期は古書の市場が豊富だったために、善本や稀本・珍本の宝庫です。当時高価だったであろう本もちゃんと購入しています。九割方調査を終えてわかるのですが、重複本が少ない、つまりきちんと選書されていることがはっきりとわかります。そして書物を収めるために、通常の図書館書庫に比べて異様に堅牢な造りの書庫が建造されました【図版16】。

図版 16

図版 17

では、いったいなぜ、岩瀬弥助は莫大な私財を投じて、こんな文庫を作ったのでしょうか？　岩瀬弥助（昭和五年没六十四歳）は西尾の肥料商です【図版17】。三十代で幡豆郡随一の資産家となり、西尾鉄道初代社長などを務めました。地域文化への貢献に意識が高く、西尾高女、西尾中学、西尾小学校などの設立に多額の寄付をした篤志家です。そんな弥助が満四十歳の誕生日を期して文庫を設立公開しました。

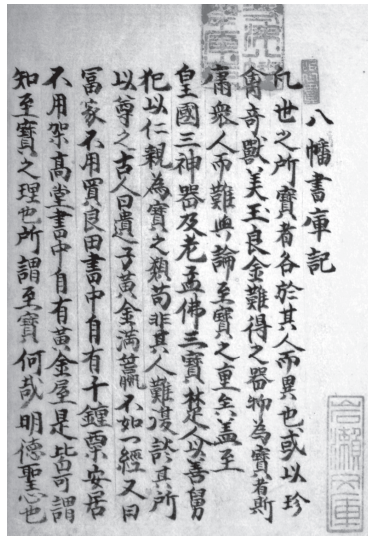
その設立の意図について、弥助の唯一残したことばが、地元の伊文神社に奉納された石灯籠の胴石に刻まれています【図版18】。



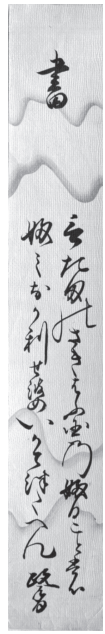
図版 18

冒頭に「余嘗て、一小文庫を設立し、之を身にも人にも施し、且つ之を不朽に伝へんと欲す」とあります。集めた書物を自分だけでなく広く公共の用に供すること、そのことによって書物の永久保存を目指すこと、この二つのコンセプトがはっきりと記されています。私は調査を始めて数年後に、初めてこの銘文の存在を知った時、頭をがつんと打たれたような衝撃を覚えました。しびれました。

その後、岩瀬文庫の中から『八幡書庫記』という資料が出てきました【図版19】。一読、またがつんと打たれました。そこには、西尾郊外の寺津村にある寺津八幡宮の神主だった渡辺政香（天保十一年没六十五歳）が、四十八歳の文政六年春、神社に文庫を併設した時の「志」が、長文の漢文で記されていました。その末尾は「凡そ物は衆と与に楽しむに如かず。藉し人の神庫の図書を閲せんことを請ふもの有らば、輙ち其の請ふ所に随ひて少しも拒まざらん。乃ち之と倶に窺ひ、日新の聖域に躋らん」と締めくくられています。これは名文で、この一文にすべての文庫や図書館のもつ意義が凝縮されているではありませんか。



図版 19



図版 20

さらに岩瀬文庫から出てきた、三河人の短冊を集めた帖の中に、政香による次の短冊が入っていました【図版20】。「書（ふみ）／言だまのさきはふ国のふることも　ふみなかりせばいかでつたへん　政香」とあります。これまた、書物のもつ文明史的意義を端的に歌いあげた名歌です。

もはやおわかりでしょう。これらの資料が岩瀬文庫に所蔵されているのは、決して偶然ではありません。岩瀬弥助はこれらの資料を通して、見ぬ世の郷土の先人である渡辺政香の志を知り、それに触発されて、より大規模な形で文庫を残そうとしたに違いないのです。確信をもって、そのように推理することが出来ます。岩瀬文庫だけではない、全国の文庫の書庫の中には、実は何よりも大切なもの、先人の「志」が詰めこまれているのです。

ところで、このような古人の深い配慮によって残された書物という宝物を、我々はきちんと活用しているでしょうか？　私にはそうは思えない。文庫の扉を開く人の数は、年々減り続けているように思われてなりません。世の中の風潮も同様で、過去を生きた人々が何を思い、どのように生きてきたのか、ほとんど無視されている。過去を生きた人を真剣に愛さない社会に、未来を生きる人への愛など望むべくもありません。

それでは、我々はいったい何をなすべきなのでしょうか。まず「何が存在するのか」を知るために、出来るだけ詳細な、「記述的」書誌データベースを各地の文庫・図書館に整備することだろうと思います。それこそが、我々の時代に果たすべき、古人への報恩であり、後世への貢献となるはずです。

我々の拵え、公開した岩瀬文庫の書誌データベースは、もちろん岩瀬文庫の内容を世の中に知っていただくための道具なのですが、さらにその先には夢がありまして、それはこれと同じような書誌データベースを外の文庫や図書館でも作ってくれないかなあということなのです。文庫や図書館だけじゃない、個人が自分の持っている五点の蔵書について書誌を知らせるというようなサイトも出現してほしい。そんな風にして、せっかく日本に豊富に残された古書について、みんなと情報を共有できる社会――それこそが文化国家です――が実現することを夢見ています。

斯道文庫さんの五十周年をお慶び申し上げます。しかし、書物の悠久の歴史から見ると、五十年はまだまだ第一歩に過ぎません。これから先も末永く、古典籍を愛し、研究し、その価値を伝える専門的図書館として、世の中を導き続けて下さいますよう、心の底より祈念いたします。